reformierte
kirche fraumünster

ニクラウス・ペーター牧師

2013年11月24日の説教―永遠の日曜日

「時と永遠、愛の口座」

わたしたちの住んでいる地上の幕屋がこわれると、神からいただく建物、すなわち天にある、人の手によらない永遠の家が備えてあることを、わたしたちは知っている。そして、天から賜わるそのすみかを、上に着ようと切に望みながら、この幕屋の中で苦しみもだえている。それを着たなら、裸のままではいないことになろう。この幕屋の中にいるわたしたちは、重荷を負って苦しみもだえている。それを脱ごうと願うからではなく、その上に着ようと願うからであり、それによって、死ぬべきものがいのちにのまれてしまうためである。　　コリント人への手紙二5章1－4節（口語訳）

親愛なる共同体のみなさん

I.

本日は、教会の暦では、「永遠の日曜日」といわれる一年最後の主の日です。時と永遠について、深く思いをめぐらせるきっかけとなり、わたしたちの生涯について、神に与えられた時ばかりか、神の永遠にまでも向き合いながら、よく考えてみる機会となる一日です。

もっとも、人生は、決して孤独なものではありません。わたしたちの生は、いくつもの関係の中で―わたしたちを人生に招じ入れ、育ててくれた両親、成長をともにしてくれた兄弟姉妹・幼馴染との関係の中や、人生の道のりに伴い、あるいはいっしょに一家をかまえて歩んでくれた妻や夫との関係の中で、また、友人関係の中で―成り立っています。人間らしい生とは、そういった命の関り合いと人生の物語に基づいて、建て上げられるものなのです。

そこで、この日曜日はまた、「死者の日曜日」としてもまもられることになります。というのも、ひとりの人との離別が、わたしたちそれぞれにとって、ひとつの決定的な節目を表すものだからです。あるいはその人が、「齢重ね、命満ちて〔長寿を全うして〕」召され、神の御元に帰ることができたと言い得る場合だとしても、それは同じことです。節目節目の人生の物語・・・わたしたちは、それらによって、生きてきました―わたしたちの基、それは、愛情、感情、与えられた時、愛する人の語ったことや行ったこと。あるいは、ときには生産的で、ときには非生産的であった諍いすらも・・・それら全てによって、わたしたちはあるのです―。葬儀の礼拝で座すとき、あるいは墓地にたたずむとき（またそれぞれの式を執り行う者として係わるとき・・・）、人は、その全てを、もう一度明るい光のうちに意識せずにはおれません。

II.

愛する共同体のみなさん、みなさんの中には、今年ひとりの人を看取り、死に至るまで付き添ってから、その方とお別れをした方もあります。そのようなみなさんは、ご自身の悲しみ、感謝、思いをあらわそうとして、フラウミュンスター教会にいらっしゃっていることでしょう。ここで生まれるものを、

「能動的な想起〔Erinnerung〕」とでも申しましょうか。「想いを・起こす〔Er-Innerung（内面化）〕」というのですから、ここでは、人生の物語の大切な一篇が、いまや心の内、想いの内に生きるようになる、というのでなければならないでしょう。

したがって、次のことが二つながらに必要になります。すなわち、わたしたちはみな死すべき存在であり、限られていて、だからこそこんなにも有り難い命の時間を持っているのだと、じっくり考えてみること。それから、もはやわたしたちのもとにはおらず、すでに神の永遠に入っていった、その人のことを、よく、よく思い起こしてみること。この顧慮と回顧があるところ、わたしたちにとって、時と永遠が、いつでも結び合ったものとなるでしょう。

III.

さて、450年の古い歴史をもつハイデルベルク教理問答〔カテキズム〕についての、わたしたちの説教シリーズも、本日で終わりとなります。このカテキズムによって、これまで10回ほどの説教がなされていくつかのライトモチーフ〔基調となる主題〕が与えられ、それらをわたしたちは、聖書本文の光のうちに考察してきました。ここで、一連の輪を結ぶにあたり、あの格調高くも簡潔な、カテキズム冒頭の問いに、ぐるりと立ち返ってみましょう。*生きるにも死ぬにも、あなたの唯だひとつの慰めは何ですか*？この問いは、それによってわたしたちが自らの生を生きるための、慰め深い知を問います。そして、そればかりか、自らの死〔期〕を生きぬいたうえで死ぬことをあたわしめるような、ひとつの確信を問うのです。

（起草の地ハイデルベルクの名で呼ばれてはいるものの、）ここチューリヒに全く太い根をもつ福音主義―改革派信仰のこの要約において、すでに死をも含む生涯のすべてが、始めから視野として受け止められているというのは、なんと素晴らしいことでしょうか！問いに対する答えはこう。わたしたちは、ばらばらで儚い個の集まりとか、〔単に物理的な〕「社会の原子」に属するのではありません。そうではなく、わたしたちはキリストのもの、イエス・キリストの共同体に属するものなのです。わたしたちは、神の御働きの内にあります。このことを認識するとき、わたしたちは、生きるにも死ぬにも慰めとなるような知のいくばくかを、もうすでに持っていることになります。

さて、本日お読みするハイデルベルク教理問答の第58問では、あの一連の輪が、次のように結ばれます。*永遠の生命の約束は、どのようにあなたを慰めるものですか*？…対する答えを読みましょう。*すでに今、わたしは永遠の喜びの始まりを、わたしの心の内に知覚しています。しかし、わたしは、この生涯の後に、どの目も見ず、どの耳も聞かず、かつてどのような人も心に留めなかった、全き幸いを得るでしょう。まさにその幸いの只中で、神を永遠に讃美するために。*
これは、非常に、実に甚だしいほどに、強烈な信仰的表現に溢れた答えです。しかも、全き幸いの所有について、などと言われると、現代に生きるわたしたちの内には、尻込みしてしまう人も多くあるかもしれません。ただ、どうぞ、この時と永遠の結びつきにぜひ注目して〔もう一度聞いて〕ください。*すでに今、永遠の喜びの始まりを、わたしの心の内に自覚しています*―。

つまり、信仰とは、すべてが無意味になるわけではないと知ることなのだ、神の内に永遠にふれる何事かがあることを、最も深いところで活き活きと確信することなのだ、というのです。したがって、信仰には、生きる喜びと何らかの関係があるということになります。生きた宗教、力溢れる信仰の目印はと問うならば、それは、わたしたちのこのはかない生涯を、既に永遠の光のもとに見ようという試みだといえましょう。また、わたしたち自身も、実際に、その光のうちに生きてみようという試みがあることです。この光は、神と結びついているので、いつまでも残り、持続し、過ぎ去ることはありません。たしかに、来るべき大いなる永遠の神の世界について、わたしたちが知っていることは、なんと僅かなものでしょう！しかし、たとえそうだとしても、本当に宗教的な信仰に、「神の永遠への展望」という要素は、まったく不可欠なのです。

IV.

さて、ハイデルベルク教理問答は、それぞれの問いと答えによせて、わたしたちに、いつもふさ

わしい聖書箇所を呈示してくれます。というのも、カテキズムはあくまでも、神の御言という大いなる聖書的言語世界における、道先案内人以上のものではないからです。この第58問にも、使徒パウロの一文を見るようにとの指示があります。わたしたちも冒頭に聴きましたコリント人への第二の手紙の御言です。*わたしたちの住んでいる地上の幕屋がこわれると、神からいただく建物、すなわち天にある、人の手によらない永遠の家が備えてあることを、わたしたちは知っている。*
力強いイメージです！パウロはここで、自身の慰めに満ちた確信について語ります。このイメージに目をむけ、直ちに明らかに示されることは何でしょうか。それは、わたしたちの肉体が、地上の住まいとして描かれている、ということです。つまりそれは、すぐにでももっとふさわしく、より良く変えられるべき住まいだというのです。いえ、わたしたちの体が、大きな一軒家だとか、まして宮殿だなどとは呼ばれることはありません。むしろ、それは幕屋だ、わたしたちがその内に住まうテントだと言われるのです・・・。
　ここで、明らかになることはこうです。わたしたちの生、それは、旅である！まるで遊牧者や、バックパッカーのように、途上にあって、今日はこちら、明日はあちらにテントを張って、移動し続ける人の歩み。人生の道を旅として歩むのだから、重すぎる荷物は持たないようにして・・・そんな旅・・・。〔逆に、〕もしわたしたちが、自らの体という住まいを、堅固なやぐらとか、宮殿とか、砦などのように見るのだとすればどうでしょう。そんな観方をすれば、移ろいやすさなどまるで存在しないかのような錯覚を、いとも容易くしてしまうのではないでしょうか。ですから、自身もまた実に皮なめし職人であり、天幕作りでもあったパウロの描くこのイメージには、よく心を突くものがあります—〔こういわれているかのようです。〕いやほんとうのところ、君は、テント暮らしをして生きているのだよ。深いお堀や百におよぶ部屋付きのお城にいるわけではなく・・・。だがね、君の旅が目指すのは、御神のましますところなのだ。過ぎ去ることのないひとつの場所、ひとつの家に向かって、君は旅をするものなのだよ—。
　それからパウロは、自らの憧れについて語り始めます。そこでは、もはや、肉体という覆いは〔テントと比べて〕いよいよ薄いものとなり、ついには衣服になります。*そして、天から賜わるそのすみかを、上に着ようと切に望みながら、この幕屋の中で苦しみもだえている。それを着たなら、裸のままではいないことになろう。*パウロは、他の聖書箇所でも、上着というイメージの世界を用いました。この人が、深い意味で、変移変遷の思索家だったからかもしれません。古いアダム〔＝人間〕を上着のように脱ぎ捨てよ！さあ新しい衣服を身にまとい、いわば、新しい人間を着るのだ—今からもう君の人生に、神に向かう展望をもって生きるようにしなさい。昔ばなしも、そのほとんど汚れてしまった服も、ずるずる引きずってはいけない。ただ、突然にほとんど裸になって、神の御前で全く恥ずかしい思いをしてしまうような、そんな生き方をするのも良くないが・・。
いずれにしても、パウロの考えの焦点は、今からもう新しい生をはじめなさい、というところにあります。そのために、この聖書箇所は、驚くような、核心をつくイースター〔復活節〕のイメージで閉じられます。死が命によって克服されるのだ、と！*この幕屋の中にいるわたしたちは、重荷を負って苦しみもだえている。それを脱ごうと願うからではなく、その上に着ようと願うからであり、それによって、死ぬべきものがいのちにのまれてしまうためである。*

V.

　ここで、わたしたちの冒頭の考察に立ち返ってみましょう。時と永遠について顧慮することは、よい具合に、全く悲観的なあり方に陥ることなしに、わたしたちの現実にせまるものでした。—〔ここで、わたしのある読書の体験についてお話しましょう。〕そのとき、わたしたちを現実的かつ快活にするものがありました。突然、わたしたちの生に、深みと輪郭線とが与えられます。影を伴いながらも、光が印象深いほど明白になって、日常の歩みの中ではほとんど気付かないものが、何か照らされるようであったのです・・・。
　これが、レベッカ・パニアン、エレーナ・イベッロ編の一冊の本を読んでのわたしの体験でした。本書の題名は、『終わりについて考える—避けられぬことに向き合う言葉集』。スイス出身の人々に

よる1，2頁ほどの短い章句を、48ほどまとめたものです。それぞれの文章には、美しいポートレートが添えてあり、書き手の顔を見ることができます。いわば、目を見つめながら言葉に触れることができるというわけです。一部著名な人もありますが、有名ではない同時代人もいました。中には、死に寄り添う仕事〔Sterbebegleitung〕に従事している人もあり、その他の医療関係者もありました。また、明瞭な宗教的な観点を持っている人もいれば、そうでない人も。しかし、その全ての人が、死についてどのように考えているか、共なる人々の死をどのように経験してきたか、そういった問いに直面しながら、それぞれの人生をどのように生きているかを、表明しているのです・・・。ぶるっとくるユーモアを飛ばすものや、ひやっとするニヒリズムをもって応じるものも中にはありますが、それ以外では、より深く、ずっと誠実で、同時に朗らかでもあるような体験や省察に出会うことができました。死についての問いに立ち向かう人々は、特別に人間らしくなり、やはり、謙虚になるものです。親密な人間関係の場では、人生において本当に大切なものである、愛の体験が見えてくるのでしょう。したがって、この人たちのほとんど皆が、わたしたちの問いに答えるにあたり、ただ自分自身の視点によってだけではなく、それぞれにとって大切な人たちの視野をも共有していたのです。多くの人が、死に向き合う体験を経て、共なる人間〔Mitmenschen〕について語るようになっていました。

ただ三例だけを。ある政治家が言うには、彼女の政治活動には、常に人間が中心にすえられてきたそうです。そして、そのことは、人が他者を愛するときにのみ実現します。「だからわたしは、やってみようと思ったのです」と、彼女は言います。「身近にいる人も、遠く離れて生活している人も、わたしが人間を愛することで、『愛の口座』を最期まで満たし続けることを。これが残る、といえる何かを遺せたと、最後に言うことができるなら、これ以上のことは必要ないのです」。

次に、二重の困難を経験しなければならなかったある女性の話しです。まず、彼女の娘が命を脅かす病にかかってしまいました。やっとの思いでその子が回復したかと思うと、今度は息子に腫瘍が見つかります。そして、この子は生き抜くことがかなわず、11才で死亡しました。この母親が、印象的に記しています。「確固として知ったことは、全く自覚をもって生きることに意味があるということです。明日はもしかするともうまったく違ったものになっているかもしれないのですから。今日という日が良いものであるなら、それを楽しむこと。そしてその日にあっては、わたしたちが世界一だと感じること。新しい人生の嵐が始まらないように、望むこと。しかしまた、わたしたちの内にはとめどなくたくさんの力が潜んでいるということを、知りながら、そうすること」。また、ひとりの心臓外科医は、医者として、わたしたちの社会にこんなにも深く根付いている、薬剤信仰、すなわち、薬が幸せと理想的な状態、永遠の命をほぼ保証してくれるなどという夢物語から、離れなければなりませんでした。反対に、わたしたちの生涯の最重要の課題のひとつとして、死を覚えることが残るというのです。「神に近づくほどに、いっそう幸いとなる。これが、わたしたちの生涯の終わりです」。

VI.

以上がわたしにとっては、どのようにして―パウロが語ったように―死ぬほどのものが、命によって呑み込まれるのか、を示す例証です。死を回避するのではなく、かえって安らかにまた確かに、時と永遠についての問いに身を置くようにすることで、両方がわたしたちの内で結び合わされてゆきます。生と―生きたいという望み、死と―死にうるという可能性。

〔ユダヤ教〕ラビのミドラシュに、すばらしく的確な観察がなされています。「人は生まれるとき、両拳を握り締めているが、それはまるで、こう言っているかのようだ。『わたしはこの世を掴んでいたい』。人は死ぬとき、両手を開いているが、それはまるで、こう言っているかのようだ。『わたしは手元に何も留めはしない。すべてあなたのものです。ああ、神よ』」。

アーメン

＊ 〔 〕内は訳者の手になります。説教原稿は、フラウミュンスター教会ホームページ（http://www.fraumuenster.ch）、「説教と礼拝 Predigt und Gottesdienst」の項でごらんいただけます。本訳文に関するご指摘、お問合せ等は訳者（大石 ohishi_shuhey@hotmail.com）までおよせください。